

「道徳」の研究

青木利恵子



🔍 キーワード

問題場面の分析 立場ごとの解決策の検討 道徳的判断力

🗨️ 主張

「道徳」では、求める子どもを「自分も他も共に大切にし、よりよい自分を求め続ける子ども」と設定した。これは、自分と他の考えを互いに尊重しながら問題状況や問題解決策を考え、自分の生活のあり方や考え方を見つめ直して向上させようとする子どもである。

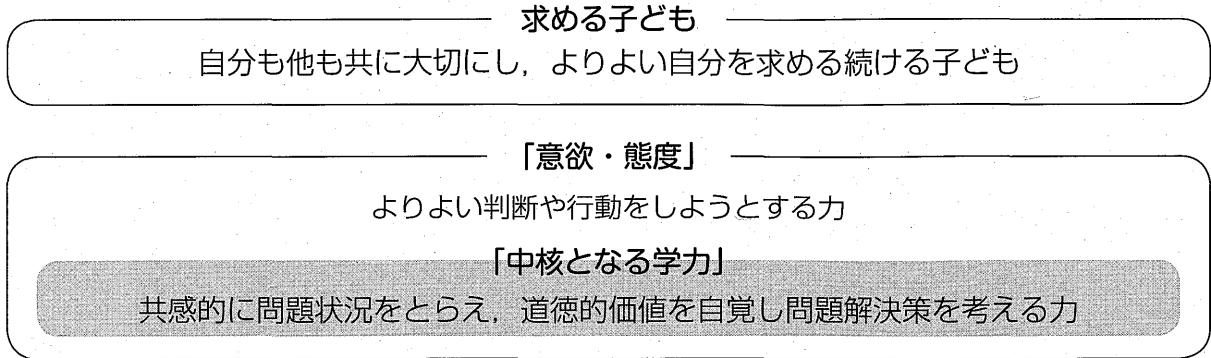
他のことを考えながら自分にとってもよいものは何か判断する力を高めることで、より現実的に問題状況や問題解決策を考えることができ、実際の生活に生きて働くものとなっていく。そのための道徳的判断力を高めるために、問題場面に対する視点を複数もって考えを深める学びに着目していく。

主人公・相手・第三者とそれぞれの立場から問題解決策を検討して多面的に問題場面を話し合う活動を組織する。このことにより、それぞれの立場から状況を分析し、問題解決策が自分だけでなく他にとってもよりよいものであるように検討を始める。こうして「問題場面の見方」を共感的かつ分析的なものへ更新し、「問題解決策」を再構成する。

このように多面的に問題状況を考えることを通して、自分も他も共に大切にし、よりよい自分を求め続ける子どもに向かうと考えた。

I 自分も他も共に大切にし、よりよい自分を求め続ける「道徳」

1. 「道徳」で求める子ども



「道徳」では、求める子どもを「自分も他も共に大切にし、よりよい自分を求め続ける子ども」と設定した。これは、自分と他の考えを互いに尊重しながら問題状況や問題解決策を考え、自分の生活のあり方や考え方を見つめ直して向上させようとする子どもである。

「道徳」の授業では、建前的に問題状況や問題解決策を考えることがあり、自分の思いよりは他を優先した実際の生活に即さないものになってしまいがちである。逆に、本音を大事にして問題状況や問題解決策を考えると他よりは自分を優先としたものになってしまい、他の考えの尊重が難しい。

他のことを考えながら自分にとってよいものは何か判断する力を高めることで、より現実的に問題状況や問題解決策を考えることができ、実際の生活に生きて働くものとなっていく。そして、これからの自分の生活のありかたや考え方を見つめ直し、よりよいものへと向上させようという意欲を高めることができる考えた。

道徳的判断力を高めるために、問題場面に対する視点を複数もって考えを深める学びに着目していく。

まずは、自分の経験を想起しながら問題状況を共感的に考え、問題状況に対する自分の考えを明らかにしていく。そして、主人公・相手・第三者のそれぞれの立場から多面的に問題状況を考える場や活動を組織する。それぞれの立場から状況を分析することにより、共感的に考えてきた問題場面に分析的な見方が加味され「問題場面の見方」を更新してくる。そして、その見方をもとに最初に考えた「問題解決策」を再構成する過程を通して、道徳的判断力を高めてくる。

このような学びを通して道徳的判断力を高めることで、自分も他も共に大切にし、よりよい自分を求め続ける子どもに向かうと考えた。

2. カリキュラム改善の視点

(1) 重点主題の設定

2「主として他の人とのかかわりに関すること」に重点を置き年間を通して取り組んでいく。行事や他教科との関連や学級の実態に合わせて1学期は身近な仲間とのかかわり、2学期は仲間や集団とのかかわりとして場を広げながら重点主題を選んでいく。その際、発達段階を考慮しながら重点主題を複時数扱いで行っていくようにする。

(2) 求める資質能力の段階制

幼稚園、小学校、中学校において「道徳的判断力」を養うために、目指す子どもの姿を発達段階を考慮して段階性を描き出していく。

	道徳的判断力
幼稚園	自分の気持ちを話し、相手の単純な感情がわかる。
小学校低	問題場面を把握し、自分の行動の善悪がわかる。
小学校中	問題場面を経験を想起しながら考え、善悪を考えて行動をする。
小学校高・中1	問題場面を自分の問題として考え、自分を内省的に見つめながら行動する。
中学校2・3	問題場面を社会や集団との関連で考え、その中で自分のあり方を考える。

3. 授業改善の方策

〈求める「道徳」の学びを具現するための学習過程〉

	〈学 習 過 程〉	〈教師の働きかけ〉
追求の足場をつくる過程	<p>資料を読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> 主人公の問題はどういうことかな。 <p>資料中の人物の気持ちを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分も主人公と同じような問題状況になったことがある。 ◎主人公の問題を解決するにはどうしたらいいだろう。 <p>問題解決策①を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 仲間はどんな問題解決策を考えただろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○問題場面の提示 ○自分の経験を想起し、主人公の気持ちを考える場の設定 ○問題解決策を考える場の設定。 ・自分の問題として考えたか。
納得のいくわかりを生む過程	<p>小グループで問題解決策を話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> あれ、ぼくの考えと少し違う。 <p>それぞれの立場から問題解決策を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎主人公・相手・第三者から見てよりよい解決策は何だろう。 <p>自分の考えを振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題に対する考え方が少し変わってきた。 <p style="text-align: right;">問題場面の見方の更新</p> <p>問題解決策②を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 主人公は、どうすることがいいのかな？ <p style="text-align: right;">問題解決策の再構成</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○人物の気持ちや行動の意味など疑問に思ったことを話し合う活動の組織。 ○立場ごとに整理して問題解決策を話し合う活動の組織。 ・問題解決策①と②の比較及び理由の変化を見とる。
よさを自覚する過程 納得のいくわかりができた	<p>学習を振り返り、考えたことをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 最初と考え方が変わってきた。自分は、○○の解決策がよいと思っていたけれど、△△という解決策がよいと思った。これから、自分が同じような場面に出合った時に実行していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習を振り返り、考えたことをまとめる場の設定。

4. 評価法

○学習プリントによる評価

問題解決策の変化の経緯を追い、記述やつぶやきから子どもの価値観の形成を評価する。

○レディネスや学習での判断と学習後のアンケートの比較

事前の主題に関するレディネスと学習後の主題に関する意識や行動の実態のアンケートの比較を行い、考え方の変化を評価する。

II 実践の概要

第5学年

「広い心で」 内容項目2(4) 寛容

1. 自分の経験を想起し、主人公の立場から問題状況を考えていく学び

子どもたちは、仲間とかかわることのよさを感じているが、時には自分の思いを大事にしすぎて、相手の間違いをなかなか許すことができずに、嫌な気持ちをかかえてしまうことが多い。そこで、本主題を学習することにより、複数の視点をもって問題状況を見つめ直し、そうした問題場面を自分なりに解決しようと意欲を高めることができるようになった。そして、他のことを考えながら自分の気持ちも大事にし、相手の間違いに対してどう行動するべきかと道徳的判断力を高めようとする姿を願った。

本主題では、友だちを素直に許すことのできない場面について経験を想起しながら資料の問題場面を理解していく。自分にも、友だちや仲間に対して素直な気持ちになかなかないことがあることを思い出し、登場人物の気持ちに共感的に理解してくる。そして、問題解決策①を考え、自他の考えの相違や対立から問題解決策①の妥当性を検討したいと意欲を高めてくる。

次に、この問題場面を分析的に見つめ直すために、主人公・相手・第三者の複数の視点から問題状況についての話し合いを行う。それぞれの問題解決策を三人の立場からみるとどうなるのか検討し、「相手の立場に立てば自分も間違えることから、自分の心のもち方を変えて、人の間違いを許してあげることが大事だ。」と共感的に考えた見方に、分析的に考えた見方を付け加えて問題場面の見方を更新してくる。そして、自分なりに問題解決策②を考え、自分の問題解決策を再構成してくると考えた。

2. 主題の構想

(1) 主題の目標

友だちの間違いが許せない「わたし」についての問題解決策を検討する中で、相手の立場に立ち自分も間違えることがあることに気づき、素直になれない気持ちを前向きにして考え、普段の生活でも相手の間違いを許していこうと意欲を高めることができる。

(2) 追求の構想 (全2時間)

問題場面

わたしはソフトバレーボールの試合で審判の間違いをしたえりさんに腹を立てています。その友だちに「一緒に帰ろう。」と言われてもなかなか素直に「うん。」と言えません。そばでかずみさんが困って見えています。

わたしも友だちに怒ってしまい素直になれなかったことがある。

ぼくも野球の時に同じようなことがあった。

◎わたしは、この後どうしたらいいのだろう。

はっきりと相手に伝えたほうがよい。

自分の気持ちを正直に言おう。

仲間の解決策も聞いてみよう。

友だちと考えが違ふ。もう少し話し合いたい。

正直に言うのはためなのかな？

◎わたし・えりさん・かずみさんの立場から見て、よりよい問題解決策を話し合おう。

えりさんの立場からしたらあまりはっきりと伝えないほうがよさそう。

けんかになるから、黙っているほうがよい。

自分はどうすることがよいかもう一度考えよう。

やさしく間違ってたよと伝える。

黙っている。

学習をして思ったことを振り返ろう。

相手の立場も考えてあげないといけないことがわかった。

今日考えたことを自分の生活にも生かしていきたい。

3. 授業の実際

(1) 間違いを伝えることが大事だから、はっきりと言おう

自分の考えをもち、素直な気持ちを話すよさをもつ友子さん。しかし、相手や他の立場から問題状況を見つめるという意識にやや弱さがみられた。他の視点から問題状況を見つめることで、自分の思いだけにとらわれずに、他とのかかわり方において柔軟に対応していこうと意欲を高めることを願った。

教師が「みんなは広い心って言うとなんかことを思いうかべるかな。」と尋ねると、「物をすぐいいよって貸してあげることかなあ？」と首を傾げながら答える子どもたち。具体的な場面の資料として「ソフトバレーボール」を提示し、考えることにした。

提示した資料の概略

ソフトバレーボールの試合の時に間違っただけの審判をしたえりさんのせいで、わたしのいるチームが負けてしまった。えりさんに腹を立てていると、えりさんが「一緒に帰ろう。」と声をかけてきた。わたしは素直に「うん。」と言えずに黙っていた。その様子をかずみさんが見て、困っていた。

「正直、友だちのことを許せないなあと思ったことある人。」の問いに手をあげる友子さん。「『わたし』の気持ちを考えられそうかな。」の問いに大きくなずいた。

主人公に共感をし始めた様子を見て、プリントに主人公の気持ちを書く場を設定した。

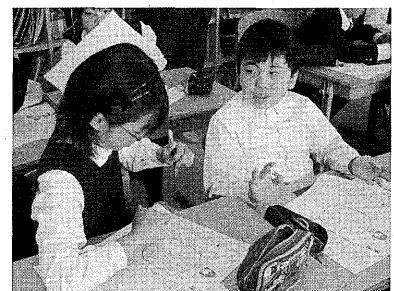
どうしよう。ソフトバレーボールの時にわたしたちのチームはえりさんが間違えたせいで負けた。わたしはアウトだったからボールをとらなかったのに、えりさんは入ったことにした。全部わたしのせいっぽくなって、あまり一緒に帰りたくないな。それに、今は腹がたってるし。(友子さんの記述)

書いたことを発表した時、「えりさんのせいで負けたから、腹が立っている。」など次々に子どもたちが主人公の気持ちを話し始めてきた。そこで、「同じようなことで、例えば友だちに悪口を言われて許せないって思ったことある？」と聞くと「うん、うん。」と友子さんはうなずいてきた。自分の経験を想起し、主人公の気持ちに自分の気持ちを重ねてきた。しかし、主人公の気持ちには共感してきたが、主人公と同じように怒りをもつだけでは解決策には向かわないので、「このままでいいのかな。」と問いかけた。それに、首を振る友子さん。仲間から「もやもやすると、えりさんに話しかけにくくなるし、仲が悪くなる。」という意見が出始めたので「◎わたしは、この後どうしたらよいのだろう。」と追求問題を設定した。

わたしは、もやもやを消すためにその場ではっきりと相手に言ったほうが良いと思う。後悔しても遅いから。(友子さんの記述)

自分の考えをもった状況で大介さんが「先生、情報交換していいですか？」と発言した。そこで、小グループによる意見交換の場を設けた。

わたしは、相手にはっきりと言ったほうが良いと思う。



友子さんの意見に「けんかになるよ。」と反対意見も出た。萌さんが「はっきり言ったほうがいいんだよ。」と発言すると友子さんは「そうだよ。」と主張した。自分の問題解決策に自信をもち、「間違いをそのままにしてはいけない」と足場を獲得した姿である。

そして「主人公のために、はっきりと相手に伝えることが大事。」と問題解決策を考えてきた。グループごとに、「言わないで一緒に帰る。」「相手に優しく伝える。」などとそれぞれの解決策が出てきて、グループ内で話し合いを始めた。他のグループの解決策を知りたがったりして「もっと話し合いたい。」との声が子どもからあがった。お互いの解決策の相違に気づき、どの解決策がよいのか考えたいと意欲を高めてきた状況と判断し、次の時間に全体で話し合うことにした。

(2) 相手の立場も考えてみよう

最初に、前の時間の問題解決策を発表し合った。「①やさしく言う。」「②はっきり言う。」「③黙っている。」の3つの問題解決策が出された。



間違っていることは、はっきりと言ったほうが良いと思う。(真希さん)

相手にいきなり言っても……。優しく言ったほうが良い。(幸恵さん)



仲間の「はっきり言う。」の意見に強くなずき、「優しく言う。」の意見には首をかしげる友子さん。相手にはっきり言うことが大事と考え、優しく言うことのよさがわからない状況と判断し、別の角度から問題状況を考えることができるように、えりさんの立場についてよくわからないと記述した静香さんの考えを取り上げた。

相手のえりさんは、わざとやって困らせようとしているのかな。そこが、よくわからない。(静香さん)



そこで、「えりさんは、わざと間違っただの？しっかりと審判ができたと思っているの？」と全体に向かって教師が問いかけた。すると、友子さんが「それは聞いてみないとわからないから。」とつぶやいた。「間違いをそのままにしてはいけないから、はっきり言うことが大事」と考えてきた友子さんだったが、相手の様子を聞いてから解決策を考えた方がよいかもしいないと考えが揺れ始めてきた状況と判断し、相手の立場からの資料を提示した。

提示した資料のあらまし (相手のえりさんの立場から)

わたし(えりさん)は、バレーボールの審判をどきどきしながらしていました。責任のある仕事だから、頑張って最後までやりとげることができました。無事に終えることができて、ほっとしたので、友だちのところへ「一緒に帰ろう。」と誘いに行きました。

正夫さんが「えりさんは自分が間違っただことに気づいていないんだ。」と話しかけたのに対し、うなずきながら「わざとじゃないんだ……。」とつぶやく友子さん。

もう一度考え直してみるかの問いかけに、友子さんはしっかりとうなずいてきた。この友子さんの姿を最初に出した自分の解決策を考え直したほうがよさそうと問いをもってきた状況と判断した。そして「◎わたし・えりさん・かずみさんの立場から見てよりよい問題解決策を話し合おう。」と設定し、それぞれの問題解決策について話し合う活動を組織した。

(3) それぞれの立場から問題解決策を話し合ってみよう

話し合い活動に入ると、友子さんは勢いよく手を挙げ、自分の考えを話し始めた。



わたしは優しく言うがいいと思う。わざと間違えたわけではないので、はっきりと言うとえりさんは嫌われていると思うんじゃないかな。(友子さん 相手の立場から)

相手の立場を考慮した解決策を話してきた友子さん。それを、えりさんにとってはっきり言うは×、優しく言うは○と整理しその理由も書いて板書した。その意見に対して、達也さんが反論してきた。

それは、逆効果で二人の間にみそができてしまう。えりさんは、気づいていないのだから、黙っているのがいいと思う。(達也さん 主人公と相手の両方の立場から)



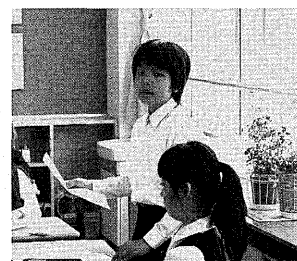
これを、優しく言うは主人公と相手にとって×とその理由と一緒に板書した。この仲間の意見に友子さんは、「反対です。」と強く言いながら挙手をした。



反対なんですけど、自分から言わないとストレスになってしまう。だから、やさしく言ったほうがいいと思います。(友子さん 主人公の立場から)

黙っているのは、主人公にとって×「ストレスになる」と板書した。主人公側のもやもやする気持ちを考えると、黙っているのはよくないと考えている友子さんの姿である。そこで、黙っていることのよさは何かを考えるために、黙っている側の浩太さんの意見を取り上げた。

他の二人の立場から考えると間違いを伝えることは気まずい。もやもやは残っているかもしれないけれど、もうちょっと大人になればいいと思う。(浩太さん 相手と第三者の立場から)



これを受けて、黙っているのところに○を板書した。そして、「このくらいは、我慢したほうがいいってこと？」と教師が問いかけると、それまでは黙ってるの意見に対しては「反対です。」と強く主張してきた友子さんが、ここで小さくうんうんとうなずいた。黙っていることのよさに少し気づき始めた友子さん。最初は、主人公の立場に共感的に考えてきたが、問題場面を仲間の意見や相手の立場から分析的に見ることにより、「間違いをそのままにしてはいけない」から「相手のことを考えて間違いを伝えることが大事」と更新してきた姿である。そこで、これまでの学習の振り返りをする場を設定した。

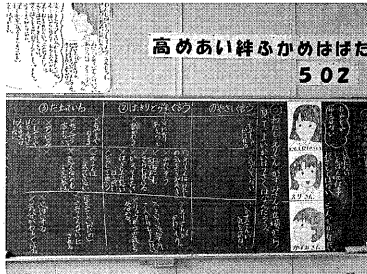
黙っている	はっきりと言う	やさしく言う	
			わたし
			えりさん
			かずみさん

黒板の表

(4) 自分の考えを振り返ろう

友子さんは振り返りのプリントに下のように書いてきた。

わたしがよいと思うのは優しく言うです。はじめはえりさんの気持ちを考えずにはっきり言うにしたら、相手が傷ついたら大変なので、一生つきあっていく仲だからと考えました。これからの生活の中では、人の気持ちを考え、その場に応じていけばいいと思います。それに、きつく言わなくても、相手がわかってくれたらいいので、その程度にしたいです。



相手の立場を考慮することで、気づかないで間違いをする時があることもあると知り、普段の生活の中でも相手の立場を考えて行動したいと問題解決策を再構成してきた友子さん。自分の意見を大事にしながらも、相手の間違いを許容することも必要であることに気づき、他とのかかわりで場に応じて柔軟に対応して考えようとしている姿である。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

立場ごとに問題解決策を検討することにより複数の視点をもって問題場面を考えることができた。

最初は、ほとんどの子どもたちが、相手にはっきり伝えることをよしとしていた。資料提示後に問題解決策を考え直し、相手の立場からは「はっきり言うと嫌な気持ちになる。」第三者の立場からは「主人公が怒ったままだと、気を遣ってしまう。」などの意見が出され、複数の視点で問題場面を考えることができた。共感的に考えてきた問題解決策をもう一度別の視点から見直すことで、問題場面を分析的にとらえ直すことができたと考える。

子どもたちの話し合いは、どの視点で語られているのか教師の方で判断し、板書に整理していった。どの立場からみてどうなるのかを明確にしていったことにより、子どもたちの話し合いの視点が明確になり、分析的に問題解決策を話し合うことができた。

2 課題

資料の提示の仕方を状況に応じて柔軟に提示する。

この主題では、資料を3つ用意した。最初に、主人公の立場から見た資料。次に、それぞれの立場から見た資料とした。相手の立場を知る必要があると子どもたちが考えてきた時に、第三者についてはどうか投げかけ、第三者の資料も提示した。しかし、必要感がやや薄い状況で提示してしまった。今後は、どの場面で出すと限定せずに、子どもの求めに応じたり、話し合いが深まらなかつたりした状況において柔軟に資料を出すように授業展開を工夫していきたい。

<主な参考文献>

- 宇佐美 寛 2005 「『経験』と『思考』を読み解く」 明治図書
日本道徳性心理学研究会 1992 「道徳性心理学」 北大路書房
村井 実 1997 「人間のための教育—閉鎖性から開放性へ—」 東洋館出版社